

キープとワラザン

平河内 毅

インカ帝国のキープ (ペルー文化省・ミイラ研究所・レイメバンバ博物館蔵)

国立科学博物館で開催中の「古代アンデス文明展」に足を運んだ際、ひときわ目を引く展示物に出会いました。それは光り輝く黄金やミイラではなく、色とりどりの紐に結び目をつけたキープと呼ばれる資料でした。

キープってなに？

文字を持たなかった古代アンデスの人々にとって、キープは重要な情報記録手段でした。縄の長さや結び目の数、繊維の素材(綿や動物の毛)や色、紐の編み方などによって、様々な情報を記録しました。

一般には食料の貯蔵量などを記録するために使用されましたが、時代が進むにつれキープの構造も複雑になり、インカ帝国の宗教や経済、歴史など情報も記録していたと考えられています。まさにアンデスの人々は糸で歴史を紡いでいたわけですね。

ところで、糸で記録をとるなんて

遠い異国の昔ばなしと思いがちですが、なんと斜里と姉妹町の竹富町でも似た手法が用いられていました。

竹富の藁算

藁算(ワラザン・バラザンなど)とは、読んで字のごとく藁を使って数をかぞえるためのものです。琉球王朝時代、学問や文字の使用が許されなかった人々が記録の補助として使い、20世紀初頭までごく普通に使われていました。竹富町では明治25年に竹富小中学校が創立され、卒業生が島の有力者となるにつれ、次第に藁算も廃止されることとなったそうです。

当館には当時実際に使われていた藁算11本が収蔵されています。右の写真はその1つで、人夫計算に使われたものです。藁の先端に節があるのは男性、節が無いのが女性を表し、本数は人数を示しています。その他にも欠席者や総数なども結びや



竹富町の藁算

撚りによって表されていました。

藁算は初見では何が記録されているのかさっぱりですし、キープは現在でも解読できないほど複雑ですから、当時は外部への情報流出の心配も無かったことでしょうか。ウイルスやサイバー攻撃の脅威におびえる現在とは大違いですね。

発行 2017年12月24日
発行所 知床博物館協力会
099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL: 0152-23-1256 FAX: 0152-23-1257